

特集にあたって

藤枝平成記念病院脊椎脊椎疾患治療センター 高橋敏行

癒着性くも膜炎は髄膜炎、脊髄外傷、くも膜下出血ばかりでなく、脊椎手術、脊髄造影や腰椎麻酔など医原的要因にも深く関連し、さまざまな疾病や原因により二次性に生じることが多く決してまれな病変ではありません。その病態には髄液循環不全や癒着による神経係留、空洞症や髄液の局所貯留による神経圧迫、くも膜炎や軟膜炎による血流障害などが関与し、個々の症例により複雑で多様な臨床像を呈します。進行性難治性であることが多く、治療戦略も悩ましいため手術も敬遠されやすい病変です。脊髄神経疾患に携わる医師、特に脊椎脊髄外科医にとっては絶対に周知すべき病態であり、治療選択肢や外科治療の成績やリスクについて把握しておく必要があります。

本企画ではこの分野のエキスパートの先生方にさまざまな観点から執筆いただきました。久保田基夫先生には癒着性くも膜炎の原因と病態について総論的な内容でまとめていただきました。多くの症例は原病因から1年以内で発症するものの10年以上の経過で臨床画像所見が顕著となる例もあり、長期的な注視も必要です。金景成先生にはくも膜下出血後も発生率はまれながら見逃されやすい点について指摘いただきました。河野修先生には脊椎脊髄損傷後の癒着性くも膜炎、脊髄空洞症の病態と治療について膨大な脊損症例を振り返り発生率や外科治療の変遷を教えていただきました。西村由介先生には術後に生じるくも膜炎と病態に応じた外科治療の組み合わせ方法を、尾原裕康先生には硬膜欠損部や癒着防止のために使用されている硬膜補填剤についてもこの疾病に関連する問題点が残されていることを教授いただきました。内藤堅太郎先生には癒着性くも膜炎の外科治療についてシャント術のポイントを中心に解説いただき、癒着剝離術の適応についても言及いただきました。

この疾患は根治的手術の難易度が理解され、2022年度診療報酬改定にて癒着性脊髄くも膜炎手術（脊髄くも膜剝離操作を行うもの）が改定されております。困窮する患者さんや治療判断に悩む主治医の糧となるよう、現状における癒着性くも膜炎の病態診断と最善の治療法を整理する企画といたしました。執筆いただいた先生方には大変有用な情報提供をいただき深謝いたします。